

精神科に入院している自傷行為が見られる未成年患者へ関わる看護師の思い

医療法人社団 五稜会病院  
 ○吉田 貴史、山北 豊、斉藤 恭央  
 鈴木 大輔、星野 美栄子

はじめに

自傷行為を行う未成年患者のカンファレンス

「まだ子供だから」 「癖がつかないように」  
 「経験不足なだけ」

看護師個人の様々な思いから患者のニーズ把握が一致しないことで、治療的アプローチが機能しない場面を経験した。

自傷行為が見られる未成年患者に抱く思いを明らかにすることで、患者の治療的アプローチと合ったニーズ把握のための示唆を得ることができるのではないか？

研究方法・目的

- 研究目的: 自傷行為が見られる未成年患者に看護師が抱く思いを明らかにする。
- 研究デザイン: 質的記述的研究
- 研究対象者: 急性期病棟勤務の管理職を除く看護師18名

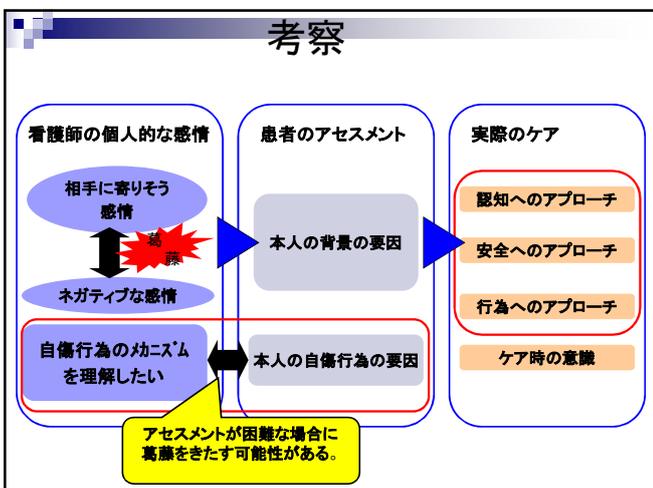
データ収集方法: Y月X日よりX+10日間。  
 「自傷行為が見られる未成年患者に対しての思い」について独自に作成した自由記述式のアンケートを実施。

分析方法: データをもとに質的記述的分析をおこなった。分析過程の妥当性を高めるために、共同研究者間が合意に達するまで繰り返し検討を行った。

本研究は当院倫理委員会の承諾を得て実施した。

アンケート結果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
看護師の個人的な感情	①相手に寄り添う感情 ②ネガティブな感情 ③自傷行為のメカニズムを理解したい	①患者の今後についての切望 ②行動への疑念/嫌悪感 ③自傷行為を引き起こす事象の疑問 自傷行為を引き起こす背景の模索
患者理解のためのアセスメント	①本人の背景にある要因 ②本人の自傷行為の要因	①本人の病状/生活歴・家庭環境/発達過程 ②本人なりの自傷行為を行う理由/きっかけ
実際のケア	①認知へのアプローチ ②安全へのアプローチ ③行為へのアプローチ ④ケア時の意識	①自尊心を高める関わり/フィードバックを重視 ②行動化を助長させない薬剤使用/生命や負傷を配慮/周囲の環境調整 ③自己表出できる関わり/対処方法習得に向けた取り組み ④目標の共有/肯定的な関わり/患者との距離感/安心感を与える関わり



結論

- 「個人的な感情」での葛藤が起きている可能性がある。
- 「病態生理として自傷行為のメカニズムを理解したい」という思いと、実際に「本人の自傷行為の要因」をアセスメントする際、難しさや多様性により、理解が難しい場合看護師に葛藤が生じる可能性がある。
- ケア時には、ネガティブな感情を意識せずにアプローチを行っている。

## まとめ

- ・自傷行為についての病態生理の理解を深めつつ、患者自身のアセスメントをチームとして行っていくことがよりよい未成年のケアにつながる

**御清聴ありがとうございました。**